

Title	特集「儀礼空間が創る宗教、実践が創る儀礼空間： テクノロジー・身体性・規範に注目して」に寄せて
Sub Title	
Author	三尾, 裕子(Mio, Yūko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2025
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.30 (2025. 7) ,p.2- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：儀礼空間が創る宗教、実践が創る儀礼空間： テクノロジー・身体性・規範に注目して
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20250701-0002

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集「儀礼空間が創る宗教、実践が創る儀礼空間
——テクノロジー・身体性・規範に注目して」に寄せて

三尾 裕子

人類学における宗教的な儀礼研究（象徴主義、構造主義、解釈主義など）においては、これまで、儀礼において定式化された行為が反復して行われることにより、その儀礼をおこなう集団の一体性や社会の再秩序化がもたらされる面が指摘されてきた。しかし、儀礼は、いつも同じなのではなく、その遂行は一回ごとに偶然による変化や行為者の創意工夫による変容が起きたり、成功したり不成功に終わったりするといった側面も指摘されている（Tambiah 1979）。そこで、本シンポジウムにおいては、「儀礼」を様々なアクター（霊的な力を持つ不可視の存在も含む）や社会的な要因と、宗教的な理念や規範（規範には、行為そのものが決められたとおりに行われているかどうかという実践上のそれも含む）が交渉されることで可変的であることが織り込まれた行為とひとまず定義する。そして、「儀礼空間」をそのような交渉が行われる空間とする。またその空間は、常に「ある」ものではなく、儀礼的行為が行われるその時々、偶然的な出来事や即興的な行為などにより作りなおされる「一時性」を持つものと考えたい（石井 2010）。

「一時性」あるいは「一回性」といったほうが良いかもしれないが一を指摘するのは、人間は定式化された行為を反復して行うことで霊的な存在からの効果を引き出せると考えるものの、実際には偶然性に満ちたことが起きるような不確実な側面もあるからだ。またタンバイアの言うような創意工夫は、パフォーマンスとしての効果を高めるというだけでなく、現実の社会の動向や規範の要請に対してより効果的に応えるための応答行為にもなりうるからだ。

儀礼は、その秩序が常に再活性化されるべく行われるとしても、様々な信仰行為の外の社会的変容に影響を受ける。しかし、そうした影響はダイレクトに儀礼を変容させるとは限らない。むしろ社会変容は、霊的な存在と人間との信仰行為を介した交渉の場に引きずり込まれ、儀礼や外部の社会秩序の再調整、微細なずれ、揺らぎをもたらしている。他方、この偶然性に満ちた儀礼の変容は、単にすべてが「一時的」「一回性的」なものに終わるわけではないことにも注意が必要だ。あるこれまでになかったような行為や実践は、確かにその場の状況に臨機応変に対処した応急的なものであるかもしれないが、その行為の有効性が認められ、許容されるものであることが緩やかに行為者たちに認められれば、一定の時間をかけて儀礼及びその空間を変容させていくことになる。儀礼や儀礼空間が、社会秩序を再生産させるものでありながらも、気が付けば変容するのは、こうしたプロセスによるだろう。

本パネルでは、このような目論見に基づいて、東アジアの諸宗教のありようを検討した。具体的なパネルの構成は以下のとおりである。

東島宗孝は、臨済宗の寺院における一般人を対象にした坐禅会を取り上げる。臨済宗においては、

個々人は本来仏であるとされる。集合的な場においてともに座り、静寂の中で規矩（規範）を体現する形式的な行為により静寂が守られることで個々の内側に仏を見いだしやすい空間が実現される。しかし、こうした参禅の在り方は、コロナ禍で集合的な行為ができなくなりオンラインによる坐禅会に変わった。東島は、その時期を経て再度禅堂での坐禅が行われるようになった現在、オンライン坐禅会を鏡として、坐禅の在り方が如何なるものであり、どのような変容を遂げているのかを検討している。

東野隆弘は、明治の廃仏毀釈で伝統が一度途絶えた金剛山における山伏の宗教実践を取り上げる。修験道研究では、従来不動明王を対象として護摩行や羽黒の十界修行などの儀礼実践が重視されてきたが、東野は、むしろ伝統が一度途絶えたことにより、山伏たちが修行の一環として行う山を歩くという行為によって、山伏の身体と山の中でいわゆるアニミズム的といえる諸霊や中世から現代にいたるまでの人々の霊などが出会っていく姿を考察する。

ケイ光大は、中国において迷信活動として弾圧された香花仏教という民間仏教による葬送儀礼が、再開できるようになって以降復活を遂げていく過程で、霊的なアクターへの働きかけとして人々が視覚や聴覚に訴える儀礼実践を行っており、そうした行為を「鬧熱」というフォークタームを手掛かりに分析する。

牧田小有玲は、九州北部のある神社で行われている安産祈願と初宮における儀礼を行為遂行的な実践と捉え、儀礼の中のジェンダー規範が維持されたり揺れ動いたりすることによって儀礼そのものがいかに再編成されていくのかを論じる。

なお、本特集は、2024年7月6日に行われた三田社会学会のシンポジウムでの発表に基づいて寄稿された。当日の発表に対しては、慶應義塾大学商学部の宮本万里先生と東京大学東洋文化研究所の藏本龍介先生からコメントを頂戴したことに感謝し、付記する。

【文献】

石井美保 2010「呪物をつくる、〈世界〉をつくる—呪術の行為遂行性と創発性」吉田匡興ほか編『シリーズ 来たるべき人類学③ 宗教の人類学』春風社 pp. 159-179.

Tambiah, Stanley 1979 *A Performative Approach to Ritual*, Radcliffe-Brown Lecture in Social Anthropology.

（みお ゆうこ 慶應義塾大学名誉教授）